

## 【論文】

# 小説における地理的愛着を抱かせる文章表現 —小路幸也著『東京バンドワゴン』を事例に—

内田 早紀

## I はじめに

### 1. 研究目的

地誌はある特定の地域や場所について、地形や人口、産業などのデータに基づいて、記述・説明する分野であると一般には思われている。地理学者はしばしば地図を使って地域を説明するが、人々が地域に抱く想いや、地域の意味を構成するもの（たとえば、歩いている人の服装、雰囲気、まちの匂い）は、データでも地図でも説明しきれないのではないだろうか。一方で、作家は地図を使わずに地域を描いている。それにもかかわらず、その場所をありありと読者が思い描けるのはなぜだろうか。本研究の目的は、小路幸也の小説『東京バンドワゴン』を取り上げ、読者に特定の場所と自分を生き生きと結び付ける「地理的愛着」をもたせる表現は何か探り、それをどう地誌に活かすことができるのかについて考えることである。この小説を題材にするのは、読者に場所の経験がなくとも、その場所に愛着をもたせる魅力があるのではないかと思ったからである。たとえば文庫本の解説では以下の通り書店員が読後感を述べている。

サチさんの語りを毎回読んでみると、どうしても下町に出かけてみたくなるのです（中略）子どもたちが登校する場面では、店から外に出て路地を曲がるともう見えなくなる、とあります。この描写をととても不思議に感じていたのですが、実際に谷根千と呼ばれる下町のあたりを歩いて路地を体験すると、その通りでした。パッと消える感じです<sup>1)</sup>。

私は生まれも育ちも広島でして、東京には一度も住んだことはなく、（中略）ですが、なぜか「東京バンドワゴン」だけは、我が故郷、あるいは我が家のように感じてしまうのです<sup>2)</sup>。

このように、現地に行きたくなり、故郷のような読後感を覚えるという点において、この本およびシリーズは秀でている。また筆者にとっては、年間400冊以上を読破

する中でシリーズ全巻を揃えサイン会にも行き、思わず現地を訪れたことのある唯一の作品である。文学界においての位置づけは後に記すが、作品を取り上げるにあたり筆者自身の関心が強い作品であることを述べておきたい。

### 2. 先行研究

人文主義地理学者トゥアンは、人と場所の親密な関係に基づくトポフィリア (topophilia) の概念を展開させた (福田 1991)。トポフィリアとは、特定の場所への評価、感情、意味を示した「場所 (topo) 愛 (philia)」とも言えるものである。また、とらえ難い人間の経験をきちんと表現することにしばしば成功しているとして芸術家を評価し、『トポフィリア』に加えて、『空間と場所』、『恐怖の景観』などの著作で、建築学、文学、心理学、哲学、人類学、アートの分野に刺激を与えてきた (水野 2020)。日本において文学作品をはじめとする芸術作品を用いた「場所」に関する論考を早くから行っていたのは、文芸評論家である奥野 (1972) や前田 (1992) であり、それらは文学作品を参考資料とした空間や場所についての考察という点から、地理学的な要素も含有するものであった (小池 2009: 23)。一方で、地理学界から文学地理学への試みとしては杉浦 (1992)、杉浦編 (1995) の文学と地理学をめぐる論考が話題となると同時に、小田 (1997) による批判的考察によって、このテーマが一定の深まりをもったように思われる。小田 (1997) は、杉浦編 (1995) の10編の論文には、統一した理論的な基礎がないことを問題としている。すなわち、資料としての文学作品、文学の中の場所イメージ論、文学の中の空間行動論、作品論・作家論というテーマが混在しているという。

### 3. 地理学的な体験である読書とは

小説を読むことが地理学的な体験だと考えるのは、実証主義的な地誌ではとらえることのできない、当たり前で疑問をもつことすらない日常をとらえることができること、そしてその日常を「ほかでもありえた」と想像する仕方を学ぶことができることの2点だと筆者は考える。

場所や地域をきちんと記録することが人文地理学の目標だとするならば、すなわちそれが地誌であり、地域の日常性を描き出すことである。では、日常とは何であろうか。それは習慣化されている当たり前の物事であり、誰かに説明する必要がないため半ば無意識化されていることであると考えられる。では、その言葉にされない日常を拾うにはどうすればよいのだろうか。実証主義的に、たとえば地域の人にインタビュー調査を行い、データを集めるとする。その結果は、日常を表しているといえるのだろうか。トゥアンによれば「人間には、自分で表現できないことは押さえておこうとする傾向がある」(トゥアン 1993: 18) という。人々が思考した上で取捨選択した末に述べたことだけでは無意識で行っていることをきちんと記録できるとはいえないだろう。加えていえば、同じ「はい/いいえ」の集計では社会的な傾向は読み取れるが、一人一人の問いへの真の答えには迫ることができない。しかし、ある場所において人々が経験し、その経験の積み重ねによって場所も新たな意味をもつのであれば、その経験をとらえることは重要である。たとえば、「奥の細道」の舞台になった地を、私たちは松尾芭蕉の経験や言葉を抜きには語るができないだろう。トゥアンはこうも述べている。

経験に基づく豊かなデータは容易に忘れられてしまうのである。しかしながら、なかなか捉え難い人間の経験をきちんと表現することは可能である。芸術家は、そのような表現を目指してきたし、しばしばそれに成功している。人間の経験の込み入った世界は、心理学、哲学、人類学、地理学といった人文科学の分野ばかりでなく、文学作品においても記録されているのである。(トゥアン 1993: 19, 強調は筆者による)

このように無意識化されている日常を拾うために、その記録を文学作品から得ることができるのではないだろうか。

また、小説を読むとその場所に行ったことがなくても愛着がわき、その場所をよく知っているかのように感じることがある「場所での経験」が地理的愛着のキーワードだとしたら、読者は小説を通して、何を経験しているのだろうか。

しかしながら、人間の経験の多くは分節化するのは困難であるし、何らかの感情や反応の特質を満足いくように測定する方策を見いだすことも不可能である。われわれは、科学的言語によって表現できないことに

ついては、否定したり忘れてしまったりする傾向がある。地理学者は、空間と場所についての自分の知識はもっぱら本、地図、航空写真、組織だった実地調査から得られたものであるかのように話し、また、人間に備わっているのは精神の知的働きと視覚だけであって、それ以外には、人間は世界を理解し世界のなかに意味を見いだすための感覚を何ももっていないかのように著述する。(トゥアン 1993: 356, 強調は筆者による)

トゥアンが述べたように、経験というものは、少しの選択肢が異なるだけで違うものになるが、それを一つずつみるのは困難である。だからこそ人間は世界の可能性を理解するために小説という手段を古くから使い、その意味を問い続けているのではないだろうか。地理学から小説を切り離すことは逆に不自然で人間を排除しているように感じる。小説というフィクションは、小説内に場所や人物、そして考えや想いを描き出す。文字だけで表現され立ち上がる空間は、ある種読者との共同作業によって生み出されるものといえるだろう。①現実の空間、②作家自身が想像した空間、③読者との間に立ち上がる空間と3種類があると考えれば、それらの間には微妙な差異がある。次の章で異化という小説の手法に触れるが、この微妙な差異があることにより、無意識化されている日常が浮かび上がってくる。ありありと描かれた作家にとっての「日常的で当たり前の世界」は、実は地誌においては重要な内容を含む。なぜならば、ある特定の地域の「生きられる経験」が小説の中に組み込まれ、これを理解することはそのまま地誌であるからである(水野 2020)。小説を用いることによって、私たちは日常をとらえ、ありありと地域を描写する方法を学ぶことができるのではないだろうか。

## II 文学地理学の方法論

### 1. 異化とは何か

ソ連・ロシアの批評家・小説家のシクロフスキーが提唱したのが「異化」という文学手法である。彼が異化について語った中で、最も有名なものが次の文章である。

そこで生活の感覚を取りもどし、ものを感じるために、石を石らしくするために、芸術と呼ばれるものが存在しているのである。芸術の目的は認知、すなわち、それと認め知ることとしてではなく、明視することとしてものを感じさせることである。芸術の手法は、ものを自動化の状態から引き出す「異化」の手法であり、知覚をむずかしくし、長びかせる難渋な形式の手法で

ある。これは、芸術においては知覚の過程そのものが目的であり、したがってこの過程を長びかす必要があるためである。芸術は、ものが作られる過程を体験する方法であって、作られてしまったものは芸術では重要な意義をもたないのである。(大江 1988: 31-32, 強調は原著者による)

「異化」を解釈した上で、その手法について作家大江健三郎はこう表現した。

それはどのようにして日常・実用の言葉から、文学表現の言葉へと転換が行われるかを示している。「異化」というしくみをつうじて、日常・実用の言葉は、文学表現の言葉となる。(大江 1988: 27)

異化というのは文学手法であり、日常からの逸脱を目指すものであるが、その本質はほかの場面でも使用される。たとえば日常を明らかにする際、外部者からの視線を使うことによって、その無意識化されたものを明らかにする手法が使われる。具体例をあげるならば、テレビ番組では「外国人からみた日本」という構図をよく目にする。日常を少しずらす、あるいは日常から浮かせることで覚える違和感は、受容者を立ち止まらせ、日常から脱却させる。本を読んだ後、自分のいた世界が少し違うもののように感じたことはないだろうか。自動化した世界で日常がマンネリ化する中、その世界から脱却する仕掛け、それが異化なのである。

この異化を大江健三郎はレベルごとに説明する。まず、一つ一つの言葉というレベルで見たとき、一定の速度で読みすごされる週刊誌の記事とダンテ『神曲』を読む者では心の動き方が違うという。

一つは、それらの単語一つ一つが、洗いきよめられたように、言葉のもつ本来の意味をはっきりと示してくる、と感じられること。もう一つは、さらに具体的に自覚できるはずだが、自分がその言葉に眼をひきつけられるようにして、ある時間をすごすほかかないということである。なめらかな氷の表面をすべってきて、ギクリと引きとめられるような抵抗を、それらの言葉によってあじあわされるのだ。

そのような印象をあわせる時、僕らはこれらの言葉を、みなれない、不思議なものとして受けとめている、というほかはない。当の言葉の意味ならば、よく知っており、さっきまでずっとなじんですらいたはずなのに……この作用が、「異化」された言葉のひきおこ

すものなのである。詩や小説をはじめとする文学はすべて、まず一つ一つの言葉のレベルで、この「異化」の手法を通過することからなりたっている。(大江 1988: 41, 強調は筆者による)

一風変わった言葉に置き換えることで、受容者を立ち止まらせ、日常から脱却させる単語レベルの異化のほか、文章レベルの異化ではどのような感覚に至るのか、次のように述べている。

この文章に書かれていることは、知覚において知っている。しかしこれまでそれがこのように書かれているのを見たことがない。このように実感したこともない。それは見なれない、不思議な書き方であって、しかも確かにこれは真実だと実感される……これが「異化」ということを見る、ひとつの指標である。(大江 1988: 50)

このように、さまざまなレベルによって読者の感覚を長びかせる「異化」の手法は文学作品を読む上で着目すべき観点である。

## 2. 小説における地名の使用について

小説の中には、①実在の地名、②架空に名付けられた地名の2種類がある。それらは同一作品の中で統一されることもあれば混合して使用されることもある。「小説のなかに実在の町の名前を使うことについて」という文を雑誌『群像』に寄稿したのは、フランス文学者の清水徹である。彼は、平岡篤頼の翻訳したパトリック・モディアノの『暗いブティック通り』(講談社刊)を読んで、次のように感じたと述べる。

小説のなかのたったこれだけの描写で、ぼくは十年ほど前に住んでいたその境界の情景、一九三〇年代につくられた建物の窓を飾る精妙な鉄細工の手すりや辻公園にそびえる高い木といったものをありありと思い出していた。(清水 1980: 35, 強調は筆者による)

何かをきっかけに、物事が鮮明に甦ることがある。それは匂いや音といった五感を刺激するものであることもしばしばあるが、小説の場合、ありありと思い出させる要因は地名なのだろうか。清水はこうも述べている。

とはいえその並木路のたたずまいを思い出すためには、そんな描写は別に要らなかつたはずである。事実、

ただ通りの名前だけが記されていくだけで、イメージが浮かびあがった場合もある。(清水 1980: 35, 強調は筆者による)

描写あるいは地名だけでも自身の経験と結びつき記憶が喚起されることがある一方で、架空の地名を使うことは読者に何のイメージをもたらすのだろうか。架空の地名を目にしたときに読者は何の経験とも結びつかないはずである。その良さと、地名に結び付いた先入観をなしに小説の空間を創造できることにありと考えられるだろう。ちょうど実在の地名の使用と架空の地名の使用のメリットとデメリットが裏返しになるような関係性だ。

ここまで地名の使用が読者との経験と結びつくために、その利点は両極端であることを述べてきたが、ここで地名だけでもイメージが浮かび上がるものの、その描写によってありありとまちを描くことは、読者にどのような影響を与えるのか、という点について考えていきたい。「小説とはその記述を手がかりに読者が創造力をくりひろげてゆくもの」だとすると、清水は次のように結論付けている。

小説のなかに実在の地名や町名を意図的に書き込むとは、現実のある都市の内部にひとつの虚構の物語をかしあたえた上で、その全体に対するある読解を試みることにほかならない。そこから一步すすめば、都市小説とは現実の都市に対する一読解にほかならないということになるだろう。(清水 1980: 35, 強調は筆者による)

小説における地名の使用は、実在の地名との1対1の結びつきを求めるものではなく、一つの解釈を提示するものであるというのだ。これを踏まえて考えると、地名を出すだけでなく地域を描写することで、作家が示したい作品世界をありありと描き出すことができると考えられるのではないだろうか。

### 3. フィクションの役割

地理学が現実世界のあらゆるものを対象にし、研究を深めている中で本論文ではフィクションを扱うため、あらためてフィクションの果たす役割、あるいはフィクションだけがもつ力というのは何かについて考えていきたい。

私たち人間は大小を問わずつねに選択しながら生きているといえる。それは最初から、一通りの道しか存在しなかったのではなく、複数の選択肢の中から一つを選び

進んでいるにすぎない。枝分かれした無数の可能性は存在しなかったのではなく、あり得たかもしれない現実ととらえることができる。その複数の未来を想定して生きたとき、人々は豊かになれるのではないだろうか。なぜならあり得たかもしれない未来に想いを馳せることで、現在の意味を再確認することもできると思うからだ。この無数の可能性を楽しむことができるのがフィクションであり、その役割だと筆者は考えている。一つの選択肢の差が生み出す未来は、選択肢ごとの振り幅に比例するわけではなく、大きな差となり得るかもしれない。複数の未来を私たちが経験することは不可能であり想像するしか方法はない。だからこそ古来より人々は想像し、物語ってきたのではないだろうか。フィクションをしょせん作り物だと見向きもしないのは容易い。しかし、フィクションに描かれているのは人であり、誰かの人生である。そして読者をここではないどこかへと連れて行く力をもつ。その力と役割を軽視することなく、人が人へと伝えようとした行為の結晶を見つめることは大事なことはないだろうか。そして、地理学におけるフィクションとは、あり得たかもしれない可能性を捨てるための、未来の構想力を養うものであり、未来への希望をもつためのものであると考える。「地理学的想像力」とは、地図からその場所についてより多くの情報を吸収することだけでなく、フィクションからその地で暮らす人々の日常に想いを馳せ、あり得たかもしれない現実に発想を飛ばすことも含まれているのではないだろうか。

## III 小路幸也とその作品の紹介

### 1. 作家小路幸也の特徴

1961年北海道旭川で生まれた。札幌市で、地元百貨店をメインクライアントにした広告制作会社に就職。エディター・ライター・プランナーとして勤務した後に、1991年の30歳を期に作家になろうと志し新人賞への投稿を開始した。2002年に講談社メフィスト賞を受賞し、翌年『空を見上げる古い歌を口ずさむ』(講談社)で作家デビューをする。現在は北海道江別市に在住する専業作家である。

デビューのきっかけとなったメフィスト賞は、1996年に創刊された講談社のミステリーを中心にエンターテインメント小説全般を扱う文芸誌『メフィスト』で、「究極のエンターテインメントを求む」という掛け声のもと始まった、賞金・締切・下読みがないという異例づくしの公募新人賞である。1994年、京極夏彦が原稿を持ち込み、即デビューしたことがきっかけで創設に至った。小路幸也の本には北海道と東京を舞台にし、タイトルにも加えた作品が非常に多いことが特徴としてあげられる(表1)。

また、自身の経験を作品に盛り込むことも多く、札幌のすすきの、および花屋でアルバイトをしていた経験や、姉やおばたち、飼っていた犬や猫など家族との関係性が作品作りに影響を与えたという。若い頃はミュージシャンを目指しており、音楽への造詣が深い。作品の執筆ペースは早く、毎月本が発売されることも多い。

## 2. 作品の特徴

ノスタルジックな文章と評されることが多く、古き良き下町の情景や人情味あふれる展開に定評がある。一人称を使った文章展開にも長けており、一作品の中でも一人称と三人称を場面によって使い分ける場合もある。作家自身の経験を織り交ぜていることも多く、デビュー作の『空を見上げる古い歌を口ずさむ』では、「旭川市パルプ町というカタカナの入った地名が本当にあって、そこで生まれ育ちました。町の基幹産業が製紙だったんです。国策パルプ旭川工場の広い敷地があり、社宅もたくさんあり、丸太とかチップと呼ばれる木を砕いたものが山ほどあってデビュー作に書いた情景そのままです」(強調は筆者による)と作品背景を自身のホームページ<sup>3)</sup>上で明らかにしている。また、夏目漱石を心の師と仰ぎ「自分を芸術の士だとか小説家という職業が尊いなどとは決して思っていないが、この世の中が生きにくいものでしかないのなら、せめて物語で楽しく心安らかな時間をもつてほしい。生きる力を得てほしい。そう思いながら、物語を書き上げている。だから、ハッピーエンドしか書かないと決めている。幸せな結末を目指す物語しか、たぶん僕には書けない」と作家としてのスタンスを述べている。

複数の媒体で、幼少期を〈テレビっ子〉と呼ばれた最初の世代として育ったことから、自分の想像力はテレビからの影響が大きいと述べている。『東京バンドワゴン』は「あの頃、たくさんの涙と笑いをお茶の間に届けてくれたテレビドラマへ。」という文言で締められており、同作品はホームドラマへのオマージュだとしている。よって『東京バンドワゴン』に描かれている下町のイメージは、現実・テレビドラマ・作者のイメージという段階を踏んで構成されているものだと述べておく。

## 3. 『東京バンドワゴン』の特徴

まず、作品のあらすじは以下の通りである。

東京の下町で、明治18年から続く老舗古本屋〈東京バンドワゴン〉を営む4世代の大家族・堀田家。古本屋3代目店主の勘一を大黒柱に、「LOVEだねえ」が口癖の還暦金髪ロッカーの息子・我南人、孫の藍子、紺、青、彼ら

表1 小路幸也の作品タイトル (一部抜粋)

北海道 (20作品)	空を見上げる古い歌を口ずさむ、そこへ届くのは僕たちの声、ホームタウン、21、カレンダーボーイ、キシヤツ、札幌アンダーソング(3)、スタンダッチダブル！(3)、壁と孔雀、ロング・ロング・ホリデイ、ピースメーカー、<銀の練亭>の御挨拶(2)、探偵ザンティビー(3)
東京 (31作品)	東京バンドワゴン(17)、東京公園、モーニング(ダイシリーズ)(4)、東京ピーターパン、荻窪シェアハウス小助川、東京カウガール、マイディア・ポリスマン(3)、テレビ探偵、明日は結婚式、隠れの子 東京バンドワゴン零

(括弧内の数字はシリーズ作品数を示す。小路幸也公式ホームページ「SHOJI YUKIYA OFFICIAL SITE sakka-run:booklover's longdiary」を参考に筆者作成。http://solas-solaz.mods.jp/ (最終閲覧日:2022年12月17日))

の配偶者と曾孫たちなど個性の強い面々が、一つ屋根の下で仲良く暮らしている。家の内外では、古本や家族にまつわる大小の事件が起こるも、すべては「家訓」に従い解決。一家の物語を伝える語り手は、勘一の妻・サチ。実は、数年前に亡くなっているが、いまだに幽霊として堀田家に留まり、家族たちの行動を見守り続けている。季節ごとに起きる不思議な事件を解決していくホームドラマである。

幽霊となっている曾祖母サチさんの生まれは華族の御令嬢。戦後、天皇陛下のある文書を親から託され逃げているときに堀田勘一に偶然助けられる。勘一の親、草平はサチの親と親交があったことから、そのまま堀田家で身を隠すことになり、周囲の目を欺くために勘一の妻と名乗るが、結果的に本当に結婚した。

作品の読者層は、10~80代まで幅広くいる。根拠としては、一つ目にインタビューにおいて、「たとえば、中学生の女の子がこの物語を読んで、『小路さん大好きになりました』という声を寄せてくれる。もちろん僕より年上の、60代、70代、80代の方までが、これを読んで、面白いと言ってくださる」と述べている。二つ目に、2014年2月23日に神保町で行われた「10代の読書会」というイベントにおいて、課題図書に選ばれた。また、2013年10月から日本テレビにて亀梨和也さん主演でドラマ化され、ロックンローラーの我南人役として玉置浩二さんが出演しエンディング曲を歌った。

本作の特徴としては、1冊につき四季が一章ずつ描かれていき、登場人物も歳を重ねていくことにある。タイトルの「東京バンドワゴン」は作中の古本屋の名前であるが、2冊目以降のタイトルにはビートルズの曲名が名付けられており、「音楽」も本作にとっては重要なメタファーだと考えられる。

次に、作品の文学界としての位置づけを、表2の通り

表2 『東京バンドワゴン』の受賞歴

年	賞	結果
2006	紀伊國屋書店本町店文芸賞	受賞
2006	キノベス	第3位
2007	第4回本屋大賞	1次投票で12位
2017	第2回吉川英治文庫賞	ノミネート
2020	第5回吉川英治文庫賞	ノミネート
2021	第6回吉川英治文庫賞	ノミネート
2021	第17回本屋大賞発掘部門	ノミネート

(小路 (2008) のあとがきを参考に筆者作成)

表3 作中における幽霊の設定

ふわふわと浮いている
一度行ったことのある場所にはすぐに移動できる
人にぶつかるとはじかれてしまう
他の幽霊には会ったことがない
匂いは感じるが食べ物は食べられない
孫の紺と仏間で少しの間会話ができる
曾孫の研人には声は聞こえないが、たまに姿が見える

(小路 (2008) を参考に筆者作成)

受賞歴からみていきたい。本屋大賞の設立の経緯としては、「商品である本と、顧客である読者を最も知る立場にいる書店員が、売れる本を作っていく、出版業界に新しい流れをつくる、ひいては出版業界を現場から盛り上げていけないか」<sup>4)</sup>と考へたことにある。特徴は、書店員の投票だけで選ばれる賞であることで、新刊書の書店(オンライン書店も含む)で働く書店員自身が、過去1年の間自分で読んで「面白かった」「お客様にも薦めたい」「自分の店で売りたい」と思った本を選び投票する形式である。『東京バンドワゴン』がノミネートした2006年の選考者は、エントリーした全国の書店員779人であり、1次投票で全国317書店の店員415人による投票により10作品に絞られた。また、2021年にノミネートした発掘部門は、ジャンルを問わず、本屋大賞の選考となる1年の期間以前に刊行された作品の中で、時代を超えて残る本や、今読み返しても面白いと思う本を書店員が一人1冊選び投票することによって決定される。

3度ノミネートしている「吉川英治文庫賞」は、これまでの文学賞と異なり、シリーズの前巻、前々巻で書かれたことまでさかのぼって作品を評価することに焦点が当てられ設立された賞である<sup>5)</sup>。対象は、複数年にわたり5巻以上の複数巻の文庫が刊行されている大衆シリーズ文学作品と、その著者。12月1日から翌年11月30日までに、文庫最新巻が刊行された作品の中から、受賞作品を決定する。約50名の選考委員に選考を委嘱し、候補作の推薦および受賞作の選出投票をお願いする方式をとっており、約50名の選考委員は、講談社を含む出版社からの代表者(各社1名)、識者、出版流通関係者で構成される。

「紀伊國屋書店本町店文芸賞」「キノベス」は共に紀伊國屋書店で行われ、書店員や客が投票に関わり決定されるものである。

以上のことから、書店員からの根強い応援やシリーズものとしての評価が高いことがわかる。またマイナーではあるが読者に最も近いと思われる視点での賞においても好評価であることも特徴的である。

#### IV 考察

##### 1. 『東京バンドワゴン』のもつ「異化作用」

本作において使用されている作品レベルの異化は「物語の語り手である曾祖母が幽霊であること」であると考ええる。幽霊であるサチさんにとって今の日常とは、今まで当たり前に見えていたものが、いつものと違った感じで現実がありありと見えてくるという経験であり、その目線を通して読者はこの物語世界を見ることができる。幽霊はフィクションであるが、幽霊とまでは考えなくとも、亡くなった家族が見守っていてくれるという考えは日常にもある。しかし作品設定の孫と実際に会話できてしまう点は現実からさらに少し浮いていると感じる。

まず、幽霊の視点の効果についてみていきたい。この幽霊の設定は表3の通りで、語り手がどこにでも行け、知っている場所には一瞬で移動できるという利点を最大限に生かしているといえる。たとえば、物語の冒頭に登場人物(家族)の紹介と家の紹介が入る。その際、「さて、右側のカフェの方をどうぞ」「そんな放蕩息子は放っておきまして、入口正面の階段を昇って二階の方へどうぞ。ああ、その一段目は飛ばして上がった方が無難ですね」(小路 2008: 13)のように、読者も一緒に移動しながら家の中を歩いているような描写がされる。幽霊の視点をカメラにし、読者の目線を誘導しながら、幽霊という非日常的な存在で少し現実から浮かせることによって、一緒に堀田家の日常を楽しんでいるかのような効果があるのではないだろうか。

本作の形式は大まかに分ければすべて「季節の語り、朝ご飯、日常、事件の発生、解決編、仏間の語り」という流れにそって進む。最後の仏間の語りで孫の紺と幽霊のサチさんが事件についての振り返りやほろりとする会話を行う場面がありエンディングとなる。この幽霊の曾祖母と話せる孫や曾孫がいることで、曾祖母は家族との繋がりを保つが、この幽霊になってしまった状況を普通に受け入れる環境、一方で家族全員にはそのことを知らせないバランスが絶妙だ。つまり、すべてを家族と共有するわけではない距離感と現実離れたことも受け止めてしまう家族という作品設定の工夫がある。仏間で手を

合わせ、先祖に心の中で語り掛ける現実世界の日常とは少し異なり、実際に今現在の出来事について会話できてしまう面白さが作品の雰囲気を作り出している。

この家族設定については、雑誌『青春と読書』2009年394号の対談<sup>6)</sup>にて作者が以下のように語っている。

中山 小路さん自身の理想もありますか。

小路 まちがいなくあるでしょうね。僕自身も家族持ちですけども、ごく普通の核家族です。和気あいあいとしているわけでもなく(笑)。

中山 和気あいあいとしていない(笑)。

小路 息子二人で、長男はデザイン学部の大学生ですが、自分の部屋にこもってパソコンでデザインの課題をやっているし、小学生の次男はずっとプレステをしている(笑)。妻はテレビドラマを見ていて、そして僕ははずっと書いている(笑)。ばらばらです(笑)。

中山 ご自身が子供の頃はどんなお家だったんですか。

小路 父は製紙工場に勤めているブルーカラーの労働者で、母は専業主婦。テレビの横に木彫りの熊がある(笑)、そんなごく普通の家庭で面白くも何ともない。中学校から音楽をはじめて、そのうちロックを聴きはじめると、やっぱりロックといえは「反抗」だから(笑)。「なんだこのセンスのない家は！早くこの家を出て俺のセンスを求めろんだ」って。ところがうちの長男は全然出て行こうとしない。

この対談からも作者自身にとっても現実の家族像とは違うものを描いているということが読み取れる。

ここで視点を変えて、この物語の語り手が曾祖母である幽霊でない場合どうなっていたかについて考えてみたい。その問いに答えるヒントはシリーズの第8作目『フロム・ミー・トゥー・ユーー東京バンドワゴン』にあると思う。これは特別編にあたり、11作の短編で構成されている。各短編の語り手が家族のいろいろな人になっていることが特徴的で気色の違う作品となっている。それぞれの視点で語られる物語は新鮮で面白いが、定番の作品よりも地理的な魅力が語られるようには感じない。その差としては、やはり曾祖母のサチさんが語る文章に地理的愛着を与える表現があると考えられる。その文章表現について次節で考えていきたい。

## 2. 地理的愛着を抱かせる文章表現

地理的愛着を与える文章表現には、情景を語る際の単語レベルの異化や周囲の人間に対する呼び方などが関わっていると考える。一つずつ考えていこう。

まず、単語レベルの異化では「風景の描写、気温、香り、日常の音、食事」などわざわざ書かないようなことを丁寧に描くことで、時間帯や雰囲気までもが想像できるような日常を描いていると感じる。また、古いものの味わいを読者に感じさせる言葉を使用している。たとえば、冒頭の東京バンドワゴン周辺の地理的描写は次のように語られる。

駅前を通りこそビルや洒落た店もありますけど、道一本中に入り込めば、大人三人並んでいっばいの狭い道路に古びた建物が軒を並べています。中には人一人、もしくは猫がすれ違うのがやっとの路地も当たり前。入り組んだ道や曲がった小路が慣れない方を惑わすこともしょっちゅう。民家も商店も新しいものより、長い年月に煤けたものが多く眼に付きます。

それでも、古いものには風情つものが漂いますよね。苔むした塀に壁を匍う蔓草や蔦、軒先に並べられた鉢植えなどが眼を楽しませ、庭の木々の枝も、塀を乗り越え道路の上に張り出して日陰を作り、香りを振りまきます。(小路 2008: 9, 強調は筆者による)

道幅を何メートルと表現するのではなく、人や猫を例えにその狭さを表現する。また、自分がその場に立ったときにどう感じるのか、どこに眼がいくのか。塀や緑などぱっと通り過ぎてしまうようなものに焦点を当て、「壁を匍う」など一瞬意味を考えるような読者に感覚を長引かせるような地理表現を使用している。また、「古いものには風情が漂う」と前置きすることで、「苔むした塀」や「蔓」など今の風景に至るまでの時間をも感じさせる文章となっている。もう一つ、重要な単語が作品タイトルかつ古本屋の店名でもある「東京バンドワゴン」という名前であり、以下のように示されている。

妙な名前でしょ？ 明治十八年の創業当時からずいぶん珍しがられたようだと先代から聞いています。瓦屋根の庇に取り付けた金箔黒塗りの看板は当時の自慢の品だったそうですが、長く風雨に晒され、今となっては只の板きれ。右から左に読むことを知らない若い方が看板を見上げ、「ンゴワドンバナにひがし？」と呪文のように呟くのを見聞きすることもありますよ。(小路 2008: 3)

名付け親は坪内逍遙だとされ、その意味は明示されていないがどの時代でも簡単には読み過ぎることができない単語である。

表4 作中における地名の使用

実在する地名	ぼかした地名表現
ハワイ, イタリア, イギリス, 葉山, 原宿, 岐阜, 飛騨, 六本木ヒルズ, 神田明神, ディズニーランド, 神保町, 銀座, 明治神宮, 下呂, 浅草寺	東京のお寺のやたら多い辺り, 一丁目の大通り, 山手線の駅, 少し離れたところの大きな神社, 第一マンション, 近くの公園, 二丁目のどん詰まりの路地, 隣の町の老人ホーム, 高級住宅街の一角

(小路 (2008) を参考に筆者作成)

また、この幽霊は家族の中で曾祖母であり生存している家族を愛している人であるからこそ、日常を眺める目線が優しく温かいものになっているのではないだろうか。幽霊の設定は表3の通りだが、自分はもう何かに触れることや食事を楽しむことが叶わないからこそ、木々の移ろいや食卓に並ぶメニュー、動物たちの行動からも季節感を味わい、日常をもう一度追体験できている喜びに満ちている。たとえば秋では、「秋になると落ち葉を撒き散らかして雨樋を詰まらせたりもするので大変」「人情味溢れるこの辺りですけど、最近ではそれがささいなトラブルになることも」といった、人間関係の様子も伺える。食事の様子からも、「もうすぐ冬至になりますが、我が家では小豆かぼちゃを食べるんですよ」「キムチはご近所の在日韓国人の方にいただくもので、そりゃあ本場の味でとても美味しいんですよ」といった人間関係まで想像が及ぶ描写がされている。

次に、周囲の人への呼び名も日常の目線を感じられるものである。たとえば「二丁目の初美さん」「二軒隣の高崎さん」「裏の右隣の田町さん」「(鴨居堂)のお嬢さん」「神社の裏の康田さん」のように、場所や商売と人物が呼応して名付けられている。これは現実世界でもよく行われることで、コミュニティ内だけで通じる名前というものが存在する。家を中心にどのようなコミュニティが作られているか、呼び名からもその日常性をとらえることができる。

続いて、作者が意図的でなく使用している言葉からも地理的愛着に繋がる文章を発見するために、語彙分析を行った。まずどの空間で物語が描かれているのかを分析したところ、居間42回、古本屋16回、カフェ12回が上位三つであった。家族を描いている作品であり、多くの人が集まる居間という空間の重要性が伺える。一方で、風呂やトイレ、各自の部屋の描写はほとんどない。幽霊である語り手はどこにでもいくことができるが、曾祖母という立場からなのか、プライベートに一線を引いているように感じる。また、6番目に使用数が多い近所の居酒屋「はる」も特徴的だ。ここでは家から少し離れることによって、会話の真剣さを強調し子供と大人の一線が引

かれる。どの空間で物語が展開されるかが、一種のメタファーとして使用されているのではないだろうか。

### 3. 作中における地名の使用について

作中では実在の地名を使用する場面と、名前をあげずにぼかしたままである場面とが登場する(表4)。実在する地名であげられているのは、海外のほかに町のイメージが強い地名が使用されていることが特徴的である。たとえば夏休みに遊びに行くという文脈で使用される葉山や、温泉が登場する岐阜の地名、古書店街の神保町や、撮影を見に行くという文脈で訪れる原宿などだ。一方で、ぼかしているのは舞台となる地域の徒歩圏内の空間についてであることがほとんどだと考えられる。高級住宅街の一角だけは例外的だが、そのほかは家である東京バンドワゴンのある場所を起点にしての距離や、場所をお互いに知っている地域の人のみが見えるような表現で地名がぼかされて描かれている。

この表現の違いで生み出されるのは、現地の感覚だと考える。私たちは普段生活しているときも、地理の詳しさは認知度に偏る。わざわざ地名で呼ばずに、家庭内や地域内での固有の呼び名をつけることも多いのではないだろうか。この作品の地名の使い分けはまさに現実社会の地名の使い分けと同じく、舞台となる地名を明らかにしないことで、読者に現地の人の目線と同じくさせている効果があるのではないだろうか。逆に実在の地名を使用している場所は、読者の先入観や固定されたイメージを利用して、地域描写やその地に行く目的の説明を省いているように感じる。

また、舞台となる土地の名前をはっきりと出さないことの効果は、読者に1対1の現地比定をさせないことにあると考える。そこには情報空間と現実の空間とが1対1で対応している電話帳やタウン情報誌には欠けている文学テキストの特性がある。

これは冒頭の書き出しからも、そのスタンスが読み取れる。

地の名を言えば土地神が飛ぶと言いますね。

あんまり古くさいばかりのものを皆さんのところに撒き散らかすのもね、ご迷惑でしょう。東京のお寺のやたらと多い辺りとだけお伝えしましょう(小路2008: 9)

地域の描写を豊富にすることで、読者に物語の舞台となる東京バンドワゴンがああ地域にあるのではないかと想像させるものの、肝心の地名を出さないために、自分



が思っている場所ではないかもしれない可能性を少し残すことができる。物語の空間を現地比定することはできず、それを行ったときに浮かび上がるのは、東京バンドワゴンが架空の店であることだ。「ない」ことは、「ある」と確認する瞬間まで、現実の場所を想像で補う楽しみが残る。東京バンドワゴンがあるかもしれないと思って現地に足を運べば、その異化の作用によりまちが新鮮に目に映ることだろう。小説の中に実在の地名と読者が現地住民になったかのように感じるぼかした地域の表現の2種類を使い分けることで、読者の固有のイメージを利用するほかに、物語の中で舞台となる地に入り込ませる効果がある。すでに場所について固有のイメージをもっている人もあえて明言しないことで新鮮に楽しむことができると思える。

#### 4. 居間の重要性

小説が展開していく中で物語のシーンがどの空間で描かれているかを計測したところ、一番多いのが居間のシーンであった。この家で使用される家庭内の場所の用語としては、「古本屋」、「カフェ」、「台所」、「居間」、「仏間」、「縁側」、「トイレ」、「お風呂」、「離れ」、「蔵」、「各自の部屋」がある。その中で、この居間という空間は、家族全員が囲む食卓であり、外の人も交えた真剣な話し合いの空間でもある。この場所の重要性はどのように考えられるだろうか。

ホームという概念は、単に自宅や家庭を意味するものではなく、自分が今どこで、誰と会って話しているかによって、その瞬間ごとに地理的スケールが変わる関係的なものである。たとえば日本人が海外にいるときは、「日本」を自分のホームと感じ、帰国すれば自分の住んでいる地域、あるいは家の中だけをホームと感じる場合もあるだろう。この小説の登場人物である堀田家は4世代の大家族である。中には嫁いできた立場の嫁や常連など多くの人が家の中へと入り込んでいる。その中で、居間という空間は堀田家の象徴であり、家全体だけでなく、家を越えて近隣地域、都道府県などに想像が及ぶ、世界を理解するモデルだと考えられる。堀田家が大切にしている家訓〈食事は家族揃って賑やかに行うべし〉にもあるように、堀田家の日常は居間にある檜の一枚板の食卓を囲みながら、家族全員で賑やかに食べる朝食から始まる。自営業のため家と職場が連続したウチとソトの概念が緩く繋がりをもっている家の構造の中で、居間という空間ははっきりとここが、思考の中で拠り所となる、どこにいても戻っていくホームだといえる場所なのである。また、物理的にだけでなく、4世代が暮らす家だからこそ、

それぞれが別の空間で過ごしていても、精神的にも堀田家に所属しているという意識をもち集合するのは居間という空間なのだ。また、作者は雑誌『青春と読書』2020年526号対談<sup>7)</sup>で家について以下のような考えを述べている。

家は、そこにいれば安心するだろうし、逆に縛られる部分もある。僕個人としては、前からいろんなところで表明しているように、家にはあまり執着しないタイプです。でも人間って、結局、ある家に育って、大人になってそこを出て行って、またその出ていった先で今度は自分の家をつくるっていう作業をしているわけですね。

自分の家ができ上がったら、そこに新しい家族ができて、そこから出て行った家族がまた新しい家をつくる。というように人生にはずっと家というものが関わってくる。それはたぶん、自分の居場所をつくるということなんです。家をつくるというのは、建物だけでなく、自分の拠りどころ、自分の居場所をつくる、見つけるということなんですよね。(強調は筆者による)

人間は家という空間をある意味で切り離すことはできず、どこかにホームをもつ生き物である。登場人物たちを物語らせる場所からも、作者の根底にある想いを語らせているように感じる。

#### V おわりに

本論文では小路幸也著『東京バンドワゴン』を取り上げ、その地理的愛着を与える文章表現を論じてきた。文学地理学という分野を扱う以上、読書というものが地理的体験であると考えられる理由や、フィクションがもつ力やその役割について丁寧に答えたつもりだ。現実を一通りと考えるのではなく、あり得たかもしれない現実を考えることによって人生は豊かになるのではないだろうか。小説から日常を読み解くことは地理的想像力と関連しているはずだ。また、作品レベルと単語レベルの異化の作用によりこの小説が現実から少し浮きながらも魅力的に感じられる理由について考えた。物語の語り手であり、堀田家の曾祖母のサチさんが幽霊であることによって当たり前だった現実をありありと見つめることができたりことや、「壁を匍う」といった単語レベルの異化を使用していることを指摘した。また、作品内で実在の地名とぼかした地名を使い分けていることに着目し、読者の固有のイメージをあえて使用する場合と読者に現地に入り込んだかのような感覚をもたせる作用があると考察した。

最後に、物語が進む中で一番使用頻度の高い空間であった「居間」に着目し、その重要性について考えた。物理的にも精神的にも、堀田家にとってのホームの象徴であるといえるだろう。居場所がどこにあるかという点を作者が重要視していることが伺えた。

頻度分布は単語レベルでも行っていたが、十分に考察しがいのある結果を探ることが叶わなかった。作家の無意識のレベルに到達できなかったことが課題としてあげられる。

文学地理学というまだ掘り起されている段階の分野は非常に考えを進めていくことも難しかったが、特別有名な作品だけでなくより一般的に大衆に楽しまれている小説でも地理的な体験が可能であると示すことができたら幸いである。

謝辞 本研究を行うにあたり、指導教員である地理学コースゼミ水野勲教授には、丁寧なご指導を賜りました。ありがとうございました。

## 注

- 1) 東京バンドワゴン第7巻『レディ・マドンナー東京バンドワゴン』(文庫版)に掲載の若木ひとえ氏(書店員・札幌市文教堂北野店勤務)による解説より(小路 2013: 359-360)。
- 2) 東京バンドワゴン第8巻『フロム・ミー・トゥー・ユー東京バンドワゴン』(文庫版)に掲載の三島政幸氏(書店員・啓文社ゆめタウン呉店勤務)による解説より(小路 2015: 360)。
- 3) 小路幸也公式ホームページ「SHOJI YUKIYA OFFICIAL SITE sakka-run:booklover's longdiary」より引用。http://solas-solaz.mods.jp/ (最終閲覧日: 2022年12月17日)
- 4) NPO本屋大賞ホームページ「本屋大賞」による。https://www.hontai.or.jp/ (最終閲覧日: 2022年12月17日)
- 5) 講談社ホームページ「吉川英治文庫賞」による。https://yoshikawabunkoshou.kodansha.co.jp/ (最終閲覧日: 2022年12月17日)
- 6) 集英社刊「青春と読書」394号(20-23)に掲載の小路幸也と中山うりの対談「マイ・ブルー・ヘブン」より引用。

7) 集英社刊「青春と読書」526号(24-29)に掲載の小路幸也へのインタビュー「イエロー・サブマリン 東京バンドワゴン」より引用。

## 文献

- 小田匡保 1997. 文学地理学のゆくえー杉浦芳夫編『文学 人 地域』はなぜ面白くないか. 駒澤地理 33: 101-116.
- 大江健三郎 1978. 『小説の方法』岩波書店.
- 大江健三郎 1988. 『新しい文学のために』岩波書店.
- 奥野健男 1972. 『文学における原風景ー原っぱ・洞窟の幻想』集英社.
- 小池友恵 2009. 作家, 三浦綾子が描いた北海道ー故郷としての場所と信仰を深める場所. 国土館大学地理学報告 17: 23-24.
- 清水 徹 1980. 小説のなかに実在の町の名前を使うことについて. 群像 35(5): 318-319.
- 小路幸也 2008. 『東京バンドワゴン』集英社.
- 小路幸也 2013. 『レディ・マドンナー東京バンドワゴン』集英社.
- 小路幸也 2015. 『フロム・ミー・トゥー・ユー東京バンドワゴン』集英社.
- 杉浦芳夫 1992. 『文学のなかの地理空間ー東京とその近傍』古今書院.
- 杉浦芳夫編 1995. 『文学・人・地域ー越境する地理学』古今書院.
- トゥアン, Y.-F. 著, 山本 浩訳 1993. 『空間の経験ー身体から都市へ』筑摩書房. Tuan, Y.-F. 1977. *Space and place: The perspective of experience*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- 福田珠巳 1991. 場所の経験ー林芙美子「放浪記」を中心として. 人文地理 43: 69-81.
- 前田 愛 1992. 『都市空間のなかの文学』筑摩書房.
- 水野 勲 2020. プリンス・エドワード島の「可能世界」ー地誌としての『赤毛のアン』. お茶の水地理 59: 1-10.

---

うちだ・さき (71期生)

## Literary Expression and Geographical Attachment: Yukiya Shoji's Novel "Tokyo Bandwagon"

UCHIDA Saki